

この一〇年間ほど、週末の休日を利用して全国各地へカヌーに出掛けている。最北の知床半島から最南の先島諸島まで、海岸も河川もカヌーの適地といわれる相当の箇所を探訪したことになる。ほとんど人間に出会うこともなく、ほとんど人工の景観を眼中にすることもなく、そして携帯電話を受信することもなく、自然と対峙することは都会に生活しては入手することのできない贅沢である。

そのような体験の途中で、公共事業の役割について疑問をもつことがある。先日、本州北端にある北半島の西側の海岸をカヌーで航行した。この一帯の最大の名勝は仏ヶ浦という秘境である。数十メートルはある海岸の絶壁が波浪により浸食され、石仏のような巨岩が林立している絶景である。数十年前に訪問したときは付近に道路もなく、小舟で海岸まで送迎してもらってしか到達できない本物の秘境であった。

ところが今回訪問してみると、絶壁の上部に道路が開通しているのは付近の漁村の生活のために必要としても、絶壁の下部の海岸に栈橋が建設されていることに驚嘆した。それも仮設の栈橋という程度ではなく、コンクリートで建造された強固な栈橋である。目的は観光の船舶が横付けするためである。それは容易に観光できるという観点からは意味がないわけではないが、秘境は無様な栈橋のために台無しになってしまった。

何年か以前に四万十川の中流をカヌーで川下りしているときにも同様の経験をした。四万十川は最後の清流という呼称で過大に評価されているが、それでも中流の一部は見渡す範囲に人工の施設がなく、一応は呼称を詐称にしない程度の景観は維持されている。ところが、その中流の川中に数十メートルはある巨大な柱脚が建設されている現場に遭遇したのである。調査してみると巨大な吊橋の支柱であった。

中流一帯には橋梁がないため、対岸の数戸の民家が不便という理由で一〇億円以上の公共事業が実現したのである。それによって民家の日常生活の不便が解消することは否定しないが、まったく周囲と調和しない巨大な構造は、長年維持されてきた景観を一瞬で台無しにしてしまったことも確実である。しかも地元では観光名所になるという期待があるらしいが、巨大な吊橋を見慣れた都会の人間には変哲もない風景にしかすぎない。

このような事例は全国にいくらかでも存在しているが、そろそろ転換を検討する時期である。現在、公共事業は情性で実施されていると批判されている。地域の主要な産業になってしまっており、突然縮小すれば地域が衰退してしまうために不要な公共事業が継続されているという批判である。それも十分な見直しの根拠であるが、公共事業の実施により入手できる価値と、それにより喪失する価値との比較をする必要がある。

対岸の住民には不便を解消してほしいという期待はあるし、行政も住民の期待に対処する役割もあるが、その対処の方法には工夫の余地がある。数戸の住民に補助をして移転してもらおうという方法もあるし、渡船を運行するという方法もある。しかし、喪失してしまった景観を回復する方法は皆無なのである。そうであれば、どちらを選択するかを議論するべきであるが、現在の社会では景観の価値はほとんど無視されている。

これから人口の減少とともに経済も縮小し、結果として財政規模も縮小する。五〇年後には公共事業予算の全額を既設の道路や港湾などの維持補修に充当しなければ社会基盤を維持できないという予測もある。当座の生活のために公共事業を実施して、回復できない価値を破壊するのではなく、これまで存続してきた地域の価値を持続させるために公共事業を選択する時代が到来している。